

〔本因坊家略紀〕下本因坊道策四代目 出生石見

常憲院様綱吉御代、琉球人來朝之時、松平薩摩守光久公が御使者を以、道策方へ申來候譯は、此度琉球國より親雲上濱比賀と申者參候、尤中山王にも願に有之候間、道策と圍碁所望之由なり、依之來駕賴入之段、使者述之、道策直に返事ならず、是より御返事可仕由申達、使者を返す、其譯は異國之者と申、例無之事故、御月番之寺社御奉行様へ書付を以、右之段伺申候之處、翌日道策を寺社御奉行様へ被召呼、此度之儀、勝手次第仕候様にと被仰渡候、依之光久公へ道策伺公可仕旨申遣し、日定り、道策弟子共四五人召れ、光久公へ參る、道策其時分は名人なるにより、濱比賀四つ置く、道策拾四目勝也、濱比賀又一番を願ふ、道策濱比賀が願にまかせ、又碁始る、其碁濱比賀二目勝なり、同日に二番有之打分なり、翌日右之趣寺社御奉行様へ御届申上候、其後濱比賀手を直らん事を願ふ、依之光久公より使者を以、濱比賀願を道策方へ申きたる、光久公よりも御挨拶有之、依之濱比賀が願に任せ、上手に對して二つの碁にゆるす、尤漢文にて免狀遣す、此免狀は林大學頭様御弟子作之、重而光久公より爲御挨拶、白銀七拾枚、卷物二十、泡盛酒二壺來る、濱比賀よりも自分にて白銀拾枚謝禮なり、

〔翁草百四十二〕碁は本ト漢土に始りし物なれども、今は中華の人甚弱く、日本の孫弟子也、琉球は日本に次ぐ、琉球の聘使來る時、あの方の國手副し來て、日本の許可を請る、中にも粹なるものは五段に直り、大かたが四段ほど也、此琉球人、中華に聘する時、中華の國手たるものは是を待請て、琉球の許狀を貰ふ、傳え聞く所、琉球の四五段に直ると也、然れば日本の碁よりは、二ツも三ツも弱きと知べし、爰を以見れば、萬藝異國より本朝の方優らん事必然也、

〔三代實錄十三〕貞觀八年九月廿二日甲子、是日大納言伴宿禰善男、中處之遠流、中相坐配流者八人、從五位上行肥後守紀朝臣夏井配土佐國、中夏井兼能雜藝、尤善圍碁、碁伴宿禰少勝雄、以善奕

名手